

聖書の自然観——環境問題への視座——

(1998 年度始業講演)

守 屋 彰 夫

1. 現在の生態学的危機

わたしたちはどのような時代に生きているのでしょうか。今年の入学者が順調に行けば卒業年が2002年と聞くと、確かに二十世紀の終りから二十一世紀へ向かっている時代に自分たちが生きているのだと実感できます。その時に未来はあるのでしょうか、明るいのでしょうか、益々便利な時代になっているのでしょうか。

わたしたちはこれまでは科学技術の進歩の恩恵に与って、便利で快適な生活を享受してきました。マイナス要因として公害問題がありますが、これまでは被害は局地的でありました。水俣の水銀汚染にしても、チェルノブイリ発電所事故にしても、そこにどれだけ大きな苦しみがあっても直接の被害者は周辺の住民に限られていました。

ところが地球環境の悪化、地球温暖化と言われるように、現在では大規模化し、地球規模で物事を解決していかなければならない時代になってきました。わたしたちは人口・資源・環境という三つの問題を解決しなければならない状況に置かれているのです。人口の爆発的増加、石油資源の枯渇、核廃棄物処理問題、オゾンホール、エルニーニョ現象、ダイオキシン、環境ホルモンなどの化学物質による土壌や大気汚染などどれをとっても、これらの諸問題を解決しない限り、人類の未来はないと言えるでしょう。

蓄積されてきたこれらの諸問題をこれまでの科学技術で克服できるのでしょうか。一年生の皆さんが受験勉強に心血を注いでいた頃、すなわち、1997年12月に地球温暖化防止京都会議、正確には気候変動枠組み条約第三

回締約国会議が開かれておりました。二酸化炭素、フロン、亜酸化窒素、アンモニア、メタンなどは、自然に発生するものもあれば、工業生産などに伴って発生するものもあります。これらが過剰に増えると、熱が宇宙に逃げにくくなり地球は余計な熱源までため込んでしまい、結果として地球を暑くすることになるのです。気温上昇を抑えるため、二酸化炭素などの排出ガスをどこまで減らせるのかをめぐって工業国と農業国、先進国と開発途上国などの国家間の利害が折り合わず会議は最後までもつれました。この紛糾した会議の結果について、次のような論評が発表されています。

「国家や民族の利益を価値基準として考えるかぎり、生命環境の維持は不可能であることを、世界の人々に明らかにしたのではないか。もはや、一国の権益、国益はもとより、自国経済の損得すらも、人類全体への七口となりうることを、われわれは目の当たりにした。いま日本人が立たされているのは、相も変わらぬ自国の権益か、それとも世界人類の平和裡の生存か、いずれをとるかという選択の問いの前である。」(弓削 達、朝日新聞『論壇』、98年1月6日朝刊)

一国の権益、国益、自国経済などと言われると、われわれの日常からかけ離れた議論のようですが、決してそんなことはありません。豊かな人が豊かに生きる、資源を大量に消費する、ということが、人類の破滅につながるものが明らかになった現在、いわゆる経済大国に住む一人一人が考え方、生き方を根本的に変更する必要が生じてきたのです。エゴイズムとは実感していない自分たちのエゴイズムをどのように克服するかという問題ですから、極めて倫理的な問題であり、公害問題とは異なる対応が必要とされる難しい問題と言えそうです。私たちは普段の生活の中で、ごみを少なくする、分別収集に協力する、ということ位はできるのですが、しかしそれ以上に及ぶ協力はどこまで可能でしょうか。わたしたちは今の生活レベルを落とす勇気がどれだけあるでしょうか。

2. 聖書学からの最初の応答

さて、便利さ、豊かさ、快適さを求めつつ、なお未だその途上にあると感じているわれわれ地球人が直面している困難な問題の淵源はどこからきたのでしょうか。1967年の『サイエンス』誌にリン・ホワイト・ジュニアが「現在の生態学的危機の歴史的根源」と題する短い論文を発表しましたが、翌年に彼の他の論文と併せて *Machina ex Deo*『神仕掛けの機械』に収録されました。この書名は明らかに古代の安っぽい演劇手法としての *deus ex machina*「機械仕掛けの神」を捩ったものです。そしてそれは、現在の技術、テクノロジー（機械）を生み出すきっかけを与えたのは、聖書の自然観であるから、今日の環境破壊を生み出した全ての原因は聖書にある（神仕掛け）という彼の主張を象徴しています。彼の主張に拠れば、聖書では、自然は人間のために存在するとされている、従って聖書は自然を征服するために科学技術を発達させる動機を人間に与え、その全ての結果を是認することになった、その結果が現在の生態学的危機を生み出した、と言うのです。やや短絡的な論理とも言えなくもありませんが、現在の生態学的危機の原因の一面を見事に言い当てているでしょう。皆さんは、日本のように聖書の直接的影響下にはない国でも、生態学的危機を生み出しているのですから、ホワイトの主張は当たらないと反論なさるかも知れません。しかし日本は明治以降に和魂洋才といって、西洋の技術のみを取り入れる努力を致しました。前提となった聖書（「神仕掛け」）は拒否しましたが、結果としての科学技術（「機械」）だけは立派に吸収したのですから、ホワイトの主張をそう簡単に退けることも難しいでしょう。

それでは、西欧の科学技術の根底にある自然理解を打破するにはどうしたらよいのでしょうか。一切の存在に靈魂を認めるアニミズムや、自然との合一を理想とする東洋の神秘主義思想の見直し、再発見が主張されましたが、果たしてどれだけ有効でしょうか。好むと好まざるとに拘わらず、今日の多くの文化は西欧の伝統的なギリシア、キリスト教的前提に技術と科学が加えた衝撃の影響下にあるのです。すなわち、アリストテレスの哲学（「形相因」、

「目的因」などによる現象理解) から新プラトン主義の考え方へ移行して以来のヘレニズムとヘブライズムの土台の上に築かれているからです。これを放棄するなどと言うのは時計の針を何百年も逆行させるような事態を発生させるようなことであり、実際には全く不可能なことと言わざるを得ないでしょう。時代錯誤も甚だしい妄想と言ってよいでしょう。

ホワイトは、聖書の自然観を槍玉に挙げましたが、その対象とされているのは、創世記 1 章 26～28 節です。創世記 1～11 章は原初史と呼び慣わされています。12 章以下からイスラエル民族の歴史、神学的には「救済史」が始まりますが、その前提になる世界の記述であり、神による世界の創造から諸民族の成立までを扱っています。ここには、皆さんが全体の流れはともかく少なくとも断片的にはお聞きになったことのある蛇の誘惑が出てくる楽園物語、ノアの洪水物語、バベルの塔の物語などの一連の神話的物語を通して聖書の世界観、自然観、人間観が集中して記述されています。「神話的」という言葉を使いましたが、原初史は「神々」が登場しないことからやはり純粹の神話ではなく、本質的には脱神話化した物語と言うべきでしょう。原初史の中で、殊に 1 章 1 節から 2 章 4 節前半までは、神による六日間での世界の創造と七日目には神が安息したという記述であります。これは普通「祭司の教理」と言われています。表面上は確かに起源に基づく説明がなされていますので、起源を説明することを主眼にした通時論 (diachronic) と理解されてきたことは、創世記冒頭の創造の記事の本質を見誤ることになったと思われまます。しかし、現代科学の先端的研究が到達した生命の歴史の模式図を参照してみると、むしろ現存世界の共時論的 (synchronic) 理解を試みたものと理解すべきことが判ってきます。右頁の図を見て下さい (中村桂子著『生命科学と人間』、1989 年、50 頁から引用)。宇宙の誕生が 150 億年前、地球の誕生が 45 億年前と言われていますが、それらを図示するとすれば図の生命の起源のずっと左側から始まり生態系の周囲を大きく取り囲むものとなるでしょう。図の生命の起源が 38～35 億年前と推定されています。創造物語が取り扱おうとしているのは、図の「生命の起源」から「現在の生態系」まで

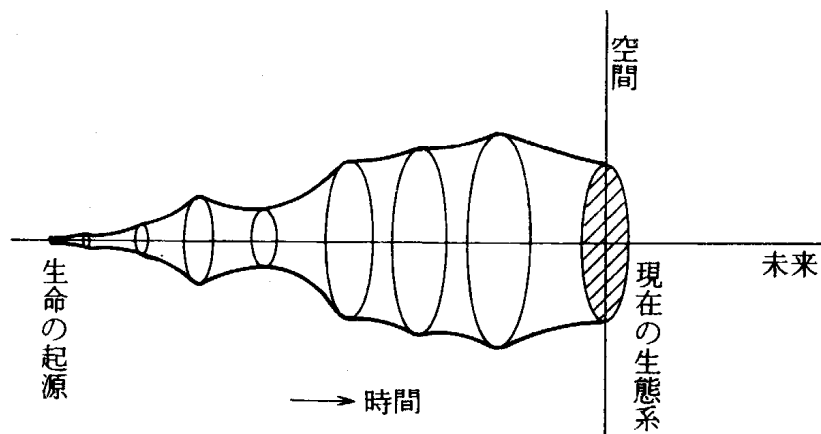


図 常にさまざまな生き物がお互いに関係し合いながら、生きてきた30億年以上の歴史 人類はこの図でいえば、最後の点の中に入ってしまうほどのところで生まれた新参者です。(筒の太さ、つまり生物の量は残念ながらまだよいデータがないので、イメージのみで正確ではありません。)

を全て念頭に置いているのではなく、図の斜線部分の秩序を共時論的に描こうとしたのだと考えるべきでしょう。今日は詳しくは扱えませんが、14～18節の天球の創造や、25節の「家畜」の箇所などを詳しく検討していただくと、私が言おうとしていることを了解できるだろうと思います。旧約聖書の勉強を始めた頃、何で始めから家畜がいるのだろうと不思議に思っていたが、起源の説明と理解するのではなく、共時論という視点を持ち込むと簡単に了解できるようになりました。原初史の中の民族表や系図も同様の思考法に由来していることは明らかです。ただ創造物語は六日間での創造に配分されていますので、時間的順序も大事な要素になっています。だから図の起源から現在までの時間的枠組みを創造物語が語ろうとしているのだという通時論的解釈が持ち込まれたのもやむを得ないことでしょう。この点に関してもう少し説明しますと、古代人にとって起源は本質だという考えがありますから、どうしても現にある秩序の起源にも言及せざるを得なかったのだとだけ述べておきます。

さて1章26～28節ですが、ここでは、神にかたどり、神に似せて創造された人間が、神から祝福を得て、それまでに造られた生き物を「支配」し、地を「従わせる」よう指示されています。人間は被造物の中で特別な地位と

特権を与えられているように受け取れます。このような被造世界での人間の位置付けが、人間を自然の支配、搾取へ駆り立てる結果になったのだとホワイトは主張します。伝統的聖書解釈には確かにホワイトの指摘する通りのものが無い訳ではありません。しかしそれが全てではないことも亦、指摘しておかなければならないでしょう。従って現在のわれわれは、聖書の読み方を再検討しなければならないのです。

3. 神学におけるパラダイム変換

長いこと東京女子大学のキリスト教学の教授であられた村上伸先生はかつて神学におけるパラダイム変換を主張されました。これはトーマス・クーンの『科学革命の構造』からヒントを得たのですが、科学の歴史では、プトレマイオスの天動説からコペルニクスの地動説へ、ニュートン力学からアインシュタインの相対性原理へ、という風に、考え方の枠組みそのものが「革命的な」変換を経て来ているというのです。新旧の考え方の枠組みが激烈な闘争を行い、通常は「革命」の形を経て決着するのです。そこでは古いパラダイムは完全に克服され、あたらしいパラダイムに取って替わられるのです。神学の場合は、伝統主義と称して古い考え、思想が残っていくという特殊な事情があるのですが、それでも二千年の長い歴史を振り返ってみると、確かにパラダイムの変換と呼べる事態が指摘できるのです。

キリスト教は起源としては、パレスチナという、どちらかというところと辺境の地で生まれ、地中海の周辺世界に住む最初は社会的には被抑圧者、下層階級、社会の底辺に暮らす人々に受容され、次第に広範な社会層に信者が増えていった宗教です。ローマ帝国ではしばしば国家権力による迫害を蒙りました。ところが、4世紀以降は、コンスタンチヌス帝の下でキリスト教がローマ帝国の公認宗教になり、やがてキリスト教の礼拝が持たれる日曜日が国家の休日にまでなり、4世紀末のテオドシウス帝時代にはローマ帝国の国教にさえなってしまう。いわゆるコンスタンチヌス的体制が確立されていく中で、キリスト教は国家と結び付いた支配者としてのキリスト教に変

質していきました。この唯一絶対性を根幹に据えたキリスト教は、宗教改革を経た後も神学的には第一次世界大戦の終了まで続いたのです。しかしヨーロッパを中心に全世界を巻き込んだこの戦争が、西欧の知識人の思想的世界に壊滅的な影響を及ぼしたのです。同じキリスト教信仰に立ちながら大量殺戮を是認さえするお互いの信仰的立場を目の辺にした時、彼らの拠って立っていた根底が崩壊してしまったのです。村上先生はこの転換点から、コンスタンチヌスの体制を廃棄して、新しい時代状況を見据えた神学、「その本来的なメッセージを新たに聞き取る」営みが始まったと捉えています。いわゆる神学におけるパラダイム変換です。「上からの」、「支配者的な」発想の転換であり、国家に包摂されていなかった原始キリスト教が持っていた「下からの視点」、イエス・キリストの「仕える者」の視点の回復です。このパラダイム変換によって、ヨーロッパと外の世界という文化の問題に限定されず、人間と自然との関係にも新たな視点が要求されることになったのです。この新たな地平に立って、聖書の自然観を再発見し、その新たなる再解釈を行うことが現在われわれ一人一人に課せられている課題と言えるのではないのでしょうか。

4. 西欧における自然観の変遷と科学の発展

先に紹介したホワイトは、聖書の自然観が西洋の科学技術の発展に促進的な力を作用させたと述べています。皆さんの中にはきっと聖書と、或いはもっと一般的に宗教と言ってもよいのですが、近代科学はお互いに矛盾するものだと考えている方がおられることでしょうか。あるいは聖書ないし宗教は近代科学の発展をむしろ阻害する役割を果たしてきたのではないかと考えているかも知れません。この両者の関係について歴史的経過を辿るということになる、それだけで科学史の一つの大きなテーマとなってしまうと思いますので、ここでは近代科学の発展に寄与した個々の科学者の自然観、彼らを科学研究に駆り立てた主観的動機がどのようなものであったのかに焦点を当てて、キリスト教と科学との関係について考えてみたいと思います。

近代的な西欧科学はキリスト教神学の母体のなかで鑄造された、としばしば言われております。すなわち、神の創造がいかに行われたかを発見することは、神の御心を理解することになるのだという確信というか信仰に拠る動機づけが、近代的な西欧科学の初期の担い手立ちの主観には厳然と存在していました。これは自然神学と称してよいと思いますので、近代科学は自然神学の延長線上にあるということになるのです。技術と科学の成長は、キリスト教の教義に深く根差す自然に対する特別な態度、つまり、自然は人間に仕えるものだという観念に負っているのです。そのような自然に対する見方や観念を明示している聖書的根拠を旧約聖書の詩編の中からいくつか、拾ってみたいと思います。

詩編 90 篇 1～2 節を見ると、

「主よ、あなたは代々われらの避け所であられた。

山々が生まれる前から

大地と世界が生み出される前から、

永遠から永遠まであなたは神にいます。」

と歌われているように、創造に先だって神が先在していたことが表明されています。これはヨブ記などの知恵文学にもしばしば出てくる考えです。創世記冒頭 1 章 1 節の「初めに、神は天地を創造された。」という句も、同じように神は自然の中にはいない、われわれが目にするもの全ては神によって造られたものであり、全てが神の被造物だ、という宣言に外ならないと思います。聖書の神は、被造世界という観点からは、外在の神であり内在の神ではないのです。自然が神の被造物だという見方としては、「天は神の栄光を物語り大空は御手の業を示す。」（詩編 19 篇 2 節）を挙げることが出来ると思います。又、自然と人間の関係についても、創世記 1 章の考えにつながるのですが、次の詩編を参照しておきます。

「あなたの天を、あなたの指の業を

わたしは仰ぎます。

月も、星も、あなたが配置なさったもの。

そのあなたが御心に留めてくださるとは
人間は何ものなのでしょう。
人の子は何ものなのでしょう。
あなたが顧みてくださるとは。
神に僅かに劣るものとして人を造り
なお、栄光と威光を冠としていただかせ
御手によって造られたものをすべて治めるように
その足もとに置かれました。
羊も牛も、野の獣も

空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。」(詩編 8 篇 4~9 節)

ここには、創造の秩序に従って人間に委ねられた世界の統治領域が具体的に記述されています。神から人へ全被造物の支配が委ねられた、との確信と喜びが表明されています。今日お配りした資料のうちの詩編 104 編をお読みいただくと、この詩にも創造主讃歌と歴史を支配する神の栄光を称える詩句を見つけられると思います。このような聖書の信仰に生きていた初期の科学者たちにとって、自然は第二の聖書であり、神の被造物の科学的探究は即、信仰的営みであった、と見る事が出来ると思います。ただ自然と人間との関係について、今述べたような考えだけが全てではなかった例として、アッシジの聖フランチェスコ(1181~1226)にも言及しておきたいと思います。彼は、人間をも含む全ての被造物の平等性という考えを持っていましたが、彼の立場は一般的にはなりませんでした。

地球が中心にあって神の国が一番外側にある中世的宇宙理解の典型は、ダンテの神曲の中に見ることができますが、このような天動説に基く宇宙理解は、コペルニクス(1473~1524)の『天球の回転について』が1543年に出版されてから、地動説へと転換されていきます。近代科学の出発点となったガリレオ(1564~1642)の『天文対話』は1632年に出版されましたが、彼にとっては、自然は第二の聖書であり、これは数学の言葉で書かれており、数学的解明が可能であるとの確信があったと言われています。「形相因」や「目

的因」などによる現象理解を根底に持つアリストテレスの哲学から新プラトン主義の考え方への移行を見て取ることが出来るでしょう。ケプラー(1571～1630)は、コペルニクスの地動説から50年後にこれと出会い、受容していったのですが、彼の天文学の基調には、先に引用した詩編19編2節「天は神の栄光を物語り 大空は御手の業を示す。」があったとされています。フランシス・ベイコン(1561～1626)は、学問の革新を唱えた学者ですが、聖書は「神の御言葉を記した書物」であり、宇宙と自然は「神の御業を記した書物」と考えていたのです。従って彼にとっても自然を正しく理解することとキリスト教信仰は矛盾するどころか、主観的にはもっと積極的な信仰的営みであったと言えるでしょう。しかしそのような主観的動機づけとは別に、結果として出てきた成果は客観的には、自然研究に人間中心の実用主義が持ち込まれたことも見逃してはならないでしょう。その後の近代科学の発展の過程では、最初期の担い手たちの主観的動機は失われ、科学は科学として自己目的的に追求されていくことになりました。

5. 新しい聖書解釈の試み

さて、先にホワイトへの批判の中で、原初史、殊に創世記1章1節から2章4節前半までの、神による六日間での世界の創造と七日目の神の安息という記事に言及しましたが、この普通には「祭司の教理」と理解されている記述は、イスラエル独自の思想が、全く孤立した環境の中で展開されたものではありません。否むしろ、イスラエル王国が崩壊してしまい、バビロン捕囚という民族の悲劇の只中で、異教世界からの宗教的、思想的攻撃に日々曝されている中で成立したと考えられています。捕囚の生活の苦しみや悲しみは、詩編137篇1～6節に蕭蕭と歌われています。そのバビロニアを含む古代メソポタミアでは、宮殿と神殿を中心に、祭儀の場で創造物語が様々に展開され、『エヌマ・エリシュ』というような作品に結晶化されています。そのような神話的世界では、創世記1章26～28節の人間の創造とその尊厳ある位置づけとは異なり、人間は神々へ奉仕する役割を与えられ、神々の労働を軽減

するために最後に人間が創造されたとされています。だから、イスラエルの祭司たちは、周辺世界の神話的世界観への批判と論争を通して、自分たちの信仰の基盤を明確にし、先祖伝来の信仰に固執するよう人々に働きかけようとしていたのだと考えられます。論争的性格は、1章14節以下の「二つの大きな光るものと星」の創造記事に顕著に現われていると思います。「太陽」や「月」という言葉を避けてわざわざ「大きな方」と「小さな方」という表現を採用しているのは、「太陽神」崇拝や「月神」崇拝の盛んな環境の中で、被支配者として居留している弱小な捕囚民が、支配者層の神々を、「あれは神々ではなく、神の被造物に過ぎない」などとは言いにくかったと推測出来るからです。無駄な軋轢を起こさないように、注意深く表現法を選択していることが窺えます。創世記1章1節から2章4節前半までの創造記事が書かれた歴史的思想的背景は、おおよそ以上のように考えられています。

先に創世記1章1節から2章4節前半までの記事は、表面上は起源論に見えるけれど、その内実はむしろ共時論的に解釈した方がよいのではないかと言いました。この主張を補完するために、同じ祭司階級の筆になる系図や民族表も同じ思考法に基く性格を持っていることを付け足しておきたいと思います。創世記5章にあるアダムの子孫の系図は、最初の間アダムから大洪水が起こる以前のノアまでの人類の広がりを系図としてまとめたものです。その後大洪水が起こり、ノアの一族だけが生き延びます。ですから大洪水後の人類は全てノアの子孫ということになります。創世記10章にあるいわゆる「民族表」には、ノアの三人の息子のセム、ハム、ヤペテの子孫として三系統に分類されて古代イスラエルをとり囲む諸民族が記述されています。この「民族表」の構成原理が何かとか、全てが創世記1章の創造記事を書いた同じ祭司階級によるのかどうか、といったような多少込み入った事情はあるのですが、それはともかくとして、この「民族表」の目的は、系図という起源論の形式を借りながら、当時の世界の諸民族の分布を共時論的に描き出そうとしたものであることは間違いないでしょう。登場する諸民族はイスラエルを中心に地中海一帯、エチオピア地方まで含めたアフリカ、黒海からイラン

高原までですが、「民族表」を書いている祭司記者の主観としては、勿論「全世界」の諸民族の分類を試みているのです。自分たちイスラエルを中心に置いて、周辺諸民族との近さ遠さの関係を血縁関係を基礎にした系図によって描こうとしているのです。興味深いことに、この「民族表」によれば、イスラエル人は、同じパレスチナ地域に住むカナン人を系図上は、アッシリア人よりも遠い血縁と看做しています。まるで現代のイスラエル-パレスチナ関係を想起させるようです。いずれにしてもこの「民族表」は、祭司記者が当時の最新の文化地理学的知識を総動員して、自分たちが生きている世界の共時論的理解を試みたものだと言えそうです。以上で創世記1章1節から2章4節前半までの記事も同様に共時論的性格を持っているという説明の補完と致します。

創造論に関しては古来、神の創造は「無からの創造」*creatio ex nihilo* という議論がありました。これを前提に議論を押し進めると、神は「無」を創造したのかという疑問にもつながり、二元論に陥る危険性があるのです。したがって現在では多分「無からの創造」は主流をなす立場ではなく、むしろ、混沌からの秩序の創造に創造論の本質を見る立場が支持されているように思われます。そのことに関連するちょっと面白い笑い話を紹介します。ユダヤ教の議論なのですが、創世記は「ベレシート」(「初めに」)という句で始まりますので最初の字母はベートです。そこで「聖書は何故ヘブライ語のアルファベットの最初の字母アレフではなく、二番目の字母ベートから始まるのか」という疑問が提出されます。聖書のように大事な書物は、始まりも最初の字母の方がふさわしい、という素朴な願いは感覚的には理解できるだろうと思います。ヒントは、字母アレフと字母ベートの筆記体の形にあります。聖書の言語はヘブライ語なのですが、これはアラビア語と同じように、右から左へ書いていきます。筆記体の字母アレフは判り易い形で説明しますと、この左側に縦線を加えた形をしています。これは右側に開いています。それに対して字母ベートは∩のように書き表します。つまり、右側は閉じていて左側に開いています。もし聖書が字母アレフで始まっていると、この字母は

右に開いているので、人は「初めに」から更に時代を遡って議論を進めてしまう危険性がある。しかし字母ベートから始めるとこれは右側は閉じているので、人は書記法に従ってそこから左へと自然に思考するようになり、「初めに」を素直に受け入れるのだ、というのです。ユダヤ人はこういう愚にもつかないような議論を楽しむところがあります。しかし愚にもつかないようであり、実に本質をついている議論だと思います。この「初めに」を出発点にし、そこから遡って思弁を費やさずに如何に神の創造の業を受容するかが、創造論全体を理解する上で極めて重要だということをこの議論は暗示しているように思います。

次にその自然観と人間観に焦点を合わせて、創造記事の思想内容そのものを多少煩瑣になるのを覚悟で分析的に述べてみたいと思います。創世記1章26節～28節に人間の創造が記述されています。人は神に「かたどり」[ツェレム]、神に「似せて」[デムート]造られたと述べられています。これら二つの用語が揃って出てくるのは創世記5章3節ですが、そこでは逆の順で出てきます。「アダムは百三十歳になったとき、自分に似た [デムート]、自分にかたどった [ツェレム] 男の子をもうけた。」とありますように、父親と息子との関係を指示するのに使われています。しかし親子関係の類比ではなく、神の被造物である人間が、神の「像」[ツェレム]であり、神の「似姿」[デムート]であるとは一体どういう意味なのでしょう。この問題は古来「神の像」*imago Dei* と呼び慣わされて盛んに議論されてきました。動物などが人間と同じように、しゃべったり行動したりするのを擬人法と言いますが、ここでは人間を神のイメージで、いわば擬神法で理解しようとしています。[ツェレム]と[デムート]という二つの類義語を並べて使用している創造記事の記者は、人間と神との関係を姿や形ではない特別な類比関係を念頭に置いていたと考えてよいでしょう。そうだとすると、人間がどの点で神の像の反映であり、どの点で神と似ているとの主張が込められているのでしょうか。

肉体的には病気や怪我で悩まされ、精神的苦悩を負いながら人生を歩み、

そして最後には死を迎える存在である人間は、神のように誤りなく完全な理想的存在ではありえない。このような認識が先に引用した詩編 8 篇 6 節前半の「神に僅かに劣るものとして人を造り」という表現に反映されているのでしょう。しかしその人間に「なお、栄光と威光を冠としていただかせ、」（同 6 節後半）被像物の支配が委ねられているのです。限りなく神に近い存在でありながら、しかし神とは絶対に等しくはあり得ない人間存在を、創世記 1 章では [ツェレム] だけではなく [デムート] をも加えた両語の併用で表現しようとしているのではないのでしょうか。確かにここでは人間の尊厳性が極端に重要視されているように見えますが、聖書記者が生きた周辺世界、すなわち、オリエントの神話イデオロギーを批判し、それに対抗するという観点で言えば、何としてでも人間の尊厳性を強調する緊急性、必然性があっただったろうと推測されます。なにしろそこでは先にも指摘した通り、人間は神々ないし支配者の労働を軽減するために造られた存在に過ぎなかったと考えられていたのですから。現在のわれわれは、人間を精神的なものと肉体的なものに分離し分析的に捉える術を心得ていますが、そのように人間を精神的なものと肉体的なものに分け、どちらかの側面を強調して人間を理解する仕方は恐らく創造記事の記者には無縁であっただろうと思われます。だから人間存在全体が、人間が人間であることがそのまま、神の「像」[ツェレム] であり、神の「似姿」[デムート] なのであり、そうだからこそ人間は神に向かい合い、神に応答する責任ある存在となり得るのであると考えられていたと思われます。このことは、人間が神の [ツェレム] と [デムート] であることを根拠に、次の 1 章 28 節で祝福を伴って、人間に委ねられた権能が「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」と、より具体的に語られ、鮮明に描写されていることから明らかであります。

その内容は、人間が創造される以前の全被造物に対する人間の関係のあり方であり、それまでに創造されたもの全てに対して、「地を従わせよ」、「支配せよ」という命令となっている。人間は神の代理者として、全被造物に対し

て「支配権」が委ねられているかの如くである。これは人間が神の主権の行使者であり、委任統治権を全面的に委ねられた存在だということなのでしょうか。人間が神の「ツェレム」と「デムート」であることが強調されていることを考慮すれば、答えは肯定的でしかあり得ないでしょう。原理的な問題としてはまさにその通りなのです。つまり、神の歴史世界への直接的介入による支配ではなく、人間を通して間接的に神の主権がこの世界に及ぶのだ、というのが聖書のこの箇所での基本思想と考えてよいだろうと思います。だからこそ神の主権の行使として、「従わせよ」[カーバシ]、「支配せよ」[ラーダー]という表現自体は極めて威圧的、強権的な表現が用いられているのです。しかしここに人間の側での根本的な誤解が生じてしまったと言ってよいだろうと思います。すなわち、本来的には神による「従属権」、神による「支配権」について言われていたことを、人間による自由な「従属権」、「支配権」と誤解してしまったのです。そこから先は管理的支配から、さらには暴力的支配をも肯定するに至ってしまったのです。しかし本来、人間に委ねられているのは、神が配慮をもって支配するという理念に沿って、神から委ねられた委託業務を細心の注意を払って遂行することなのです。2章4節後半以下のいわゆる「楽園物語」を、4節前半までの創造記事とどのような関連の中で解釈するかについては、いろいろな学説があるのですが、ここではその問題には深入りせず、現行聖書では両者は一応は続きとなっているので、その線に沿って解釈を進めていきますが、2章15節には、主なる神が人にエデンの園を「耕し」[アーバド]「守る」[シャーマル]ようにされたことが述べられています。人間が最初から労働の義務を負っている存在であることは、聖書の人間観として実に興味深い事柄ですが、その義務の内容は、もっと興味深く感じられます。

2章5節に「土を耕す人」と出てきますし、3章23節でも人は「土を耕させる」存在と記述されていますように、2章4節後半以下の聖書の人間観では大地と人間との関係が非常に重要視されています。何よりも人間の素材は「土の塵」(2章7節)ないし「土」(3章23節)なのです。そして人はこの

「土」を「耕す」[アーバド] 存在なのです。この「耕す」[アーバド] という動詞は、王や支配者のために働くときは「仕える」、「奉仕する」と訳されますし、それが名詞化されれば「奴隷」や「召使い」となります。また神のために働く場合には「礼拝する」、「奉仕する」と訳されます。「土」が目的語の場合には「耕す」と訳されてきましたが、最近のある解釈では、この動詞の本来の意義を強調して「土に仕える」という訳が提出されております。つまり、人間は自然に仕える存在であり、神の委託への応答性をこの聖書の箇所から読み取ろうとしております。この立場から見れば、人間が自然を自由に処理できるのだという人間中心主義のみを聖書から引き出すのは無理な解釈と言えるでしょう。どんなに科学技術が発展しても、根本的に人間は「土に仕える」存在なのであり、最後は「土に戻る」(創世記 3 章 19 節) 存在なのです。

人類の未来存在へ警鐘が鳴らされ、ようやく危機感が共有されつつあるこの時代に生きる一員として、私たちが真剣に自然環境問題に取り組んでいかなければなりません。その時、従来のような伝統的聖書解釈ではなく、新しい時代の要請に応じた聖書の読み方が求められているように思われます。今日取り上げた中のいくつかの項目、例えば [神の像] *imago Dei*、[地の支配] *dominium terrae*、[管理職] *stewardship* の再考が、聖書の自然観、人間観の新しい解釈へと導くであろうと同時に、自然環境問題への有効な視点を提供するであろうと期待しています。最後に自然環境問題になぜ科学ではなく聖書を持ち出したかについて弁明しますと、先に述べたように聖書は自然の中での人間存在について共時論的議論を展開しています。「人間とは何か」という問いはどんなに科学技術が発展しても常に問われ続けられる問いであり、聖書はその問いへの答えを提供し続けていくだろうと確信しているからであります。聖書学に関わる者として、現在益々発展しつつある宇宙論や生物科学をでき得る限り学びつつ、同時に「人間とは何か」、「自然とは何か」という共時論的問いを問い続けていきたいと願っています。そのことに関連して現代の宇宙論について先端的な研究者であるスティーヴン・ホーキングの

言葉を引用してこの講演を閉じることにします。

「科学は宇宙の起源を説明できるかも知れない。しかし『なぜ宇宙はわざわざ存在しているのだ』という問いに科学は答えられない。私も答えを知らない。」

[当日に講演原稿として用意しながら、数百人の新入生には口頭では伝えるににくい事柄は省略せざるをえなかったところがありました。今回、原稿を整理し直し、全体の口調は当日の講演の形式を出来るだけ生かしながら、論文として一応完結したものになるように努めました。準備の段階で下記の文献を参照しましたが、講演であったので、出典箇所を具体的には言及していません。読者は、筆者がどこでどれだけこれらの諸研究に負っているか推察できるだろうと思います。参考にさせて戴いた主要な文献を挙げることで謝辞と致します。]

参考文献

- 栗原 康著『共生の生態学』(岩波新書, 1998年).
G. リートケ著, 安田治夫訳『生態学的破局とキリスト教—魚の腹の中で—』(新教出版社, 1989年).
牧野信次「旧約聖書における自然」(『時の徴』81号 1997年10月27日, 5~13ページ).
丸山茂徳・磯崎行雄著『生命と地球の歴史』(岩波新書, 1998年).
間瀬啓允『エコロジーと宗教』(岩波書店, 1996年).
中村桂子著『生命科学と人間』(NHK ブックス, 1989年).
A. R. ピーコック著, 塚田 理・関 正勝訳『神の創造と科学の世界』(新教出版社, 1983年).
G. フォン・ラート『旧約聖書神学』(日本基督教団出版局, 1980年).
佐柳文男「創造論の神学的位置づけ—神学と自然科学—」(『知と信と大学—古屋安雄古稀記念論文集—』ヨルダン社, 1996年, 284~309ページ).
関 正勝「自然と人間」(『総説実践神学』, 日本基督教団出版局, 1989年, 269~285ページ).
富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』(新教出版社, 1993年).
月本昭男『創世記I』(日本キリスト教団出版局, 1996年).
渡辺正雄『科学者とキリスト教』(講談社ブルーバックス, 1987年).
リン・ホワイト著, 青木靖三訳『機械と神—生態学的危機の歴史的根源—』(みすず書房, 1972年).
安田治夫「自然の神学」(『総説現代神学』熊沢義宣, 野呂芳男編, 日本基督教団出版局, 1995年, 245~267ページ).